

岩瀬昭典さん

河北新報社・論説委員



みなさんこんにちは、河北新報の岩瀬でございます。私は仙台を中心とした都市部での街づくり、それから仕事おこしについて感じていることを述べてみたいと思います。菅野理事長のご挨拶のなかで規制緩和の話がございましたが、それでもって仕事が出来ますよと言ってること自体、これはちょっとまやかしじゃないかと思えます。なかなか時間がかかるかという肝心なところで規制緩和が進んでいないところがありまして、仕事が本当に身近なところでなかなか生まれてこないことを切に感じています。

具体的に話をしたいと思いますが、例えば露店が非常に賑わいを見せている福岡市などと比べても宮城は規制が違うんですね。かつては60件くらいの露店の方たちが夜にホンワカとした雰囲気の中で仙台の市民に愛されながら仕事をしていたわけです。ところが昭和40年に「露店飲食店取り扱い要綱」というのができまして宮城県と宮城県警、仙台市が協議して一代限りで、あとは道路の使用を認めないというような取り決めをしたんですね。加えて衛生環境という問題で保健所のほうでも道路を占有する露店がそこで営業する場合のいろんな条件が厳しくなったんです。すでに10年前の段階で仙台の露店は8つか9つ、今はさらに半減していると思います。

では、なぜ露店かというのですね、わたしは少々変な連想をします。「失われた10年」、「経済敗戦」という今の状況だとも思います。

バブルの崩壊以降。私たちは非常に豊かになっていながらも実は今の労働環境なり経済環境というのは戦争直後の危機に近いのではないかと捉えてもう一回いろいろなものを考え直していくべきなんじゃないのか、そのくらいの気持ちを持たないとやっていけないよ、と思っています。昭和40年くらいの仙台の露店最盛期には、徒手空拳から皆さん頑張って露店を作ってですね。「何とかのおでん」とか、「タン焼き」といった仙台名物が出てきているわけですよ。「仙台露店の会」の方たちは10年前に一生懸命露店の存続を訴えました。それは、やはり10年早かったですね。今もう一回、声を上げて露店を復活させるようなことを考えていかなければならないと思います。そのときに山際先生がおっしゃったミッションというもの、いわゆる使命感というものですが、今、仙台が露店を復活させるのならばどういうふうにもっていくのか、高い理想と目的性をもつことが必要だと思うんですね。「経済敗戦」といながらもわれわれは時代の変化に敏感でいなくてはいけないし、それと同時に仙台の露店文化も追求しなくてはいけないと思います。

規制を緩和して、露店を復活させて、更に仙台の特長を出していくというのはやはり時間のかかることです。しかし、いわゆるファーストフードとは違った、いろんなかたちの露店がかたまって、連帯していくといういろいろなことができるんですね。例えばバブルのときに高いビルが立つ予定だったところが中心部でもかなり広く今、駐車場になっているわけですね。その部分をたとえば労協連で安く借りる、水道の部分とかトイレもやるとか持ち回りもある程度やる。そういう格好で露店を10くらい並べて家庭料理をゆっく

り味わえる露店のコーナーだとか、半調理したものの、例えば福祉の食事サービスの部分から配送でやってもらうとかです。そんな形で連帯していくことも考えられるのではと思うんです。コストはとにかく下げていくことが前提です。他のところでない露店の特徴を出すとすればですね、中華料理の露店のコーナーが続いているとか、ロシア料理、四川料理ありという形であれば一番いいんです。ゆっくりと食事ができて、ということになればいいなと。これは私の夢です。

私は中国に年一回、定点観測みたいな格好で仕事と遊びを兼ねて行くんですが、上海の南に1300をこえる島で構成された船山市という町があるんです。そこは4大仏教の霊地で、上海からお客さんが、松島とか平泉とかと同じくらいの人数、年間200万人くらい来て食事をするわけです。それぞれ門前露店なんですね。その露店がなんと2キロくらいズーっと続いているんです。そこはたまたま中国最大の漁港です。季節によって魚種が変わりますが、ホーローびきのバットに生の魚を氷を浮かべてひとつの露店で30くらい並べて「1匹いくら」で値段をつけています。伊勢海老が一匹50元、ちょうど800円くらい、だいたい8人くらいで食べられるという、そういう形ですね。仕事が終わると中国の人たちは気兼ねなくビールを飲んで、暇があればそのオーナーがギターや胡弓を弾いてサービスするとかです。そういうことをやるんです。

日本の場合「きれいきれい」でなければ駄目だというのがあり、やっぱりそういう意味でも国・行政機関がもう一段の工夫をすべきだと思います。ただ行政の対応を待って、皆さんの声が届かなければどうしようもないわけですね。改革改革といっても私から見れ

ばアリバイ工作ですね。「やってるよ」といっただけの話なんで、労協連のような自分たちで経営し、また仕事をする労働者であるそういう観点の人たちが、ぼかっと開いた穴をうめていく運動、仕事をつくる今から大きな役割を果たしてくれるものと私は期待しています。

それと、地方のミニスーパーがよくやる手なんですが、駐車場の前に露店を出して物を売るという方法を応用して、コンビニの駐車場の一角を露店として使わせてもらう、そういう形の提案をしていけないかというのがあります。水道もあり衛生上の問題もいろいろです。そういう形でいくと、あそこにはいったむろしているジベタリアンの問題でも、露店があれば違った形になりますし、4時間程度とか限定して、きれいにやっていくとすればまたコンビニの魅力がでてくる。これは本邦初公開なんですが、その話をローソンにもっていくかセブンイレブンにもっていくか、ぜひ私のパテントとして記憶してください(笑)。

終戦直後の話をしましたが、仙台は焼け野原になったんですね。たくさんのいろいろな屋台があったはず。私は昭和26年生まれですから記憶はあまりないんですが、あの雑然とした賑わい、暖かさというのは本当になつかしいんですよ。いつまでも懐かしんでいられますが、ただ露店ができないのであれば、その部分を埋めていくような取り組みも考えたほうがよいのではと思います。どうもありがとうございました。